

2月28日 花の癒やしを皆さんに



アレンジメントだけでなく花束の贈呈もありました

市内でハウス園芸をしている串間市花き生産者4名が、丹精込めて育てた美しい花で作ったフラワーアレンジメントを串間市民病院に贈呈しました。春を感じさせるような優しい色彩を放つのは、スターチス・スイートピー・菊・センニチコウ・ストック・トルコギキョウ。この贈呈はコロナ禍で疲弊している医療従事者の方へ癒やしを届けようといわれ、玄関口であるロビーに飾られました。約2週間程度展示され、医療従事者のみならず来院者も癒やしました。今回の贈呈にあたり、生産者代表の平川俊一郎さんは「病院の方々は大変コロナ禍で疲弊していると思うので、少しでも花の持つ癒やしを味わっていただいで皆さんに元気をとると思って贈呈しました」と心の温まる思いを述べていました。

3月3日 企業からの寄付を活用し救急車を更新

本市は、宮崎市に本社を置く平和リース株式会社の松田真義社長からいただいた寄付1100万円を活用し、高規格救急自動車1台を更新しました。松田社長は、母親が救急車による搬送で一命を取り留めた経験から、同社の事業所がある宮崎県・鹿児島県の各自治体に寄付金を贈呈して救急車導入を後押ししています。消防本部で行われた受納式には、松田社長、市長、消防長・署長らが出席。松田社長は「1人でも多く市民の尊い命を救っていただきたい」と話していました。



寄付を行った同社の松田社長(左から2番目)

福島高校は、地域活性化策を研究する「地域創生学」の発表会を市文化会館で行いました。2年生の探究科学クラス28人が、串間中学生らを前に発表。生徒たちは「医療教育、まちづくり」など分野ごとに6班に分かれて、昨年の6月末から調査・研究を進めてきました。まちづくり班は「仲町商店街の活性化」がテーマ。商店街の現状を知るため約300人にアンケート調査を実施し、その結果商店街の認知度が低かったことから、各店舗の詳細を掲載したリーフレットを作成しました。リーフレットは道の駅など市内の各店舗に設置予定です。同班の佐藤佑亮さんは「研究を通じて串間の魅力を再発見できた。多くの人に商店街を利用してもらえたらうれしい」と話していました。

3月4日 福島高生が地域活性化策を提案



空き家などを活用した自習室の設置なども提案していました

2月10日 謎解きでSDGsへの理解深める

SDGs(持続可能な開発目標)への理解を深めてもらおうと、本市は2月に市内の小学5、6年生を対象にしたオンライン授業を行いました。児童が楽しく遊びながら学べる学習プログラムを開発するチーム「アソマナクティブ」(東京)が講師を担当。授業初日の10日は有明・大平小学校で行われました。授業はクイズ形式で行われ、世界には飢餓で苦しむ人が約8億人いることや、文字の読み書きができない15歳以上の人が約7.6億人おり、そのうち約3分の2が女性であることなどを学びました。有明小6年生(取材時)の萩原創汰くんは「SDGsのいろいろなことを楽しく学べてよかった」と話していました。



授業は市内の9小学校で行いました

2月16日 空き家対策の協定締結



空き家に関する協定締結は、県司法書士会とは県内自治体で5番目、県土地家屋調査士会とは県内自治体で初めてです

本市は宮崎県司法書士会、宮崎県土地家屋調査士会と空き家対策に関する協定を締結しました。今後も空き家の増加が予想されることなどを踏まえて、相互に連携して新たな空き家の発生を未然に防ぐために今回の締結に至りました。市民から相続登記や財産管理などの相談があれば県司法書士会、登記や境界確認などについては県土地家屋調査士会に紹介などを行います。市役所で行われた締結式には、県司法書士会の石灘寛樹会長、県土地家屋調査士会の谷口和隆会長が出席。石灘会長は「専門的な知見を生かして協力していきたい」、谷口会長は「課題解決に向けて一緒に取り組んでいきたい」と話していました。

2月19日 親子で手作りベンチ制作

地元木材に触れてもらおうと、串間市林業研究グループ連絡協議会は親子向けの木工教室を市中央公民館体育館で行いました。小中学生の親子ら約20人が参加。参加者は会員のアドバイスや補助を受けながら、電動ドライバーを使ってビスを打ち込んでスギ木材を組み合わせて木製ベンチを作り上げ、最後にやすりをかけて完成させていました。参加した大東小学校6年生(取材時)の竹中利橙くんは「ビスを打ち込むときの力加減が難しかったけど楽しかった。自分の部屋に置いて使用したい」と笑顔で話していました。



補助を受けながら木材にビスを打ち込む児童